

落語と都々逸

菊池真一

一、はじめに

都々逸が落語にどのように取り入れられ、どのように生かされているか、速記資料・録音テープ起し資料に基づいて検証してみる。

主な資料は、『円朝全集』(注1)、『口演速記』明治大正落語集成『(注2)』、『落語全集』(注3)、『古典落語』(注4)、『円生全集』(注5)、『五代目古今亭志ん生全集』(注6)、『米朝落語全集』(注7)である。

二、三遊亭円朝と都々逸

(一) 万延元年の円朝

大阪大学忍頂寺文庫に光盛舎さく丸撰の『都々一はうた節用集』なる書物が二種類ある。同名異書である。このいずれにも、三遊亭円朝の都々逸が掲載されている。忍頂寺文庫G212を甲本、忍頂

寺文庫G247を乙本とする。甲本は、蓬左文庫本(尾191160)と同内容だが、蓬左文庫本には『都々一國會』という手書き題簽が付いている。乙本と同じものには、国文学研究資料館本と菊池蔵本とがあるが、内容は同じものながら、丁の綴じ順がことなっている。

甲本『都々一はうた節用集』所載の円朝作都々逸は、

おまへゆへならういつらいめも(はうた)みやまのおくのわ
びすまゐしばかるてわさいとくるまほそたにがはのぬのさら
し)いとやせぬぞへともかせぎ(浅草 円朝)

というものである。

乙本『都々一はうた節用集』所載の円朝作都々逸は、

こひのしんくにあきかせもれてこゑもほそるよきりぎりす(三
遊亭円朝)

というものである。

円朝は、天保十年生れ。安政五年二十歳の時に浅草茅町に転居して世帯を持っており、万延元年二十二歳時にはここにいたものと思われる。前年の安政六年には真打となっており、万延元年頃は新作の工夫を重ねていた頃であろう。光盛舎さく丸一派との関りは詳ら

かでないが、この時期、都々逸連・端唄連と交際のあったことは興味深い。

(二) 『圓朝全集』

『圓朝全集』全十三巻に収められた三十八の人情噺等を調べると、都々逸の引用は、一箇所しか見られない。巻十一の「鏡ヶ池操松影」に、

都々一にも有る通り、人の恋路の邪魔する奴は犬に喰れて死ぬが、いと、実に捌けない奴だねえ、

とあるのみである。正に男女二人が楽しんでる所に男が踏み込んだ場面を唄ったもので、そのものずばりの都々逸である。

「鏡ヶ池操松影」は、『圓朝全集』巻十三の解説によれば、明治二年頃の作、単行本としては明治十八年に出版されたという。若い頃、都々逸の創作もしていた円朝の噺に都々逸の登場することの少ないのは、意外な感じがする。

三、明治期落語と都々逸

『口演速記』明治大正落語集成『所載落語のうち、明治期に発表された三百七十九席について調べると、都々逸が五首出て来る。

第四巻所載「夢の株式」(三代目三遊亭円遊)、『百花園』二百四号 明治三十年十一月三日)には、次のようにある。

夢で大変な

夢でなりとも会してお呉れ夢ぢや浮名が立はせぬ

これは都々逸と云ふ書物に出て居ります………
これは、耳からの情報ではなく、目からの情報であることを示している。

第五巻所載「美人の乳」(三代目春風亭小柳枝)、『百花園』二百一十号 明治三十二年三月三日)には、次のようにある。

人の恋路の邪魔する奴は犬に食はれて死ぬは宜(い)い。
これは、男女二人でいる所を邪魔された者の心中表現である。

第六巻所載「全快」(三代目三遊亭円遊)、『文芸倶楽部』三巻十二号 明治三十年九月十日)には、次のようにある。

夫故都々一にもありますが
落語家(はなしか)殺すにや刃物は要らぬ欠伸三つで直く殺す

なか(ママ)と云ふ文句がありますのが証拠でございます。
これはマクラでの、言わば遊びの部分とも言うべきものである。

第七巻所載「二段目」(三代目柳家小さん)、『文芸倶楽部』十六巻 二号 明治四十三年一月十五日)には、次のようにある。

快い心持に温たまつて俗にいふ湯懸(ゆぶくれ) 都々逸
「先でー丸く出りや、なに此方でーも、角にやーデやせぬー
恋の月………」

「其からどうしたんだー」跡を聞いて居る人がある。
これは湯屋の湯船の中でのど自慢様々の中の一つである。

第七巻所載「子別れ」(三代目柳家小さん)、『文芸倶楽部』十八巻 二号 明治四十五年一月十五日)には、次のようにある。

一度云や判る事だよ二度も三度も諍(くだ)いぢやないか、汝(てめえ)だつて泥水飲んだ人

これは癪に障つて唄つたという都々逸であるが、破調である。

四、大正期落語と都々逸

『(口演速記)明治大正落語集成』第七巻には、四十三席の大正期落語が掲載されている。これについて見ると、都々逸そのものが引用されている咄はない。「本膳」(三代目柳家小せん)、『文芸倶楽部』二十一巻十四号。大正四年十月十五日)に、

江戸市中でさへ言葉の交りがございませう。都々逸を唄ふ節が違つて居る、今は区で分つて居りますが、麹町と日本橋とは都々逸の節まで違つたさうで、又番町には番町言葉といふものがございませう。

とあるのみである。

五、昭和初期落語と都々逸

『落語全集』全三冊は昭和四年の刊行である。これによつて昭和初期の落語における都々逸を伺う。

『落語全集』上巻所載「天災」(春風亭柳橋)には、次のような一節がある。

紅「モウ宜しい、貴下(あなた)は唄はお好きかな」

○「大好きだ、唄と来た日にやアお前さんの前だが、デ、一だ」
紅「デ、一……成程都々一は宜かつたな、情があつて中々良い文句がありますな」

○「良い文句があるなんて、お前さんの前だが世の中にデ、一ぐらゐの妙(おつ)なものねえ、一四国西国島々までも都々

一ア恋路の橋渡し」と云ふが全くだよ。「爪(つね)りや紫食ひ付きや紅(あか)よ、色で仕上げたこのからだ」「小指切らしてまだ間もないに、手まで切るとは胴欲な」と云ふなア何(ど)うだい、タンクス」

紅「タンクスは恐れ入つたなあ、アハ、ハ、ハ、乃公(わし)のはそんな妙(おつ)な文句ではないが、豈さん聞いて頂きたいな」

○「ハッハ、話せる、この逆童」

紅「タンクスの後が逆童は驚きましたナア、アハ、ハ、ハ、ハ、頭はられて痛くはあれど、笑つて居られりや気が楽だ」借りたものなら寒くはあれど、脱いで返せば気が楽だ」「己(おの)が稼業を精出す人は、骨が折れても気が楽だ」

○「上野の動物園で子供を生んで、ノソノソ歩いてゐりや気がらくだつてえのはどうだい」

これは、紅羅坊名丸先生と八公らしき人物とのやりとりである。八公が飽つばい都々逸を披露するのに對して、紅羅坊が道歌めいた都々逸で返す、この対照の妙が何とも言えない。七七七五というのは枠組みであるから、そこに男女の痴情を盛ることもできれば、教訓啓蒙を盛ることもできる訳である。

『落語全集』上巻所載「洒落小町」(桂文治)には、次のような一節がある。

『家(うち)は家内に任して置いて……』などと云ふ古い都々逸がありますが、

こゝでは下の七五が省略されている。

『落語全集』中巻所載「士族の商法」(古今亭雷門)には、次のような一節がある。

おや世の中は三日見ぬ間の桜かなといふが、変れば変わるものだな、馬に乗つて家来を連れて往来をした殿様が、武士の見識を捨ててしまつて、汁粉屋になるとは感心だ、「時世時節とあきらめしやんせ馬に乗る殿汁粉売る」ツてな何(ど)んなもんだい……

これは事実をそのまま都々逸にしただけのものである。

『落語全集』中巻所載「道具屋」(春錦亭柳桜)には、次のような一節がある。

けれども石川五右衛門などは死ぬときに都々逸を唄つたつてね、石川や浜の真砂は尽きるとも我が衣手は露にぬれつゝツてね

ここでは、七七や七五があると何でも都々逸だと思つてしまう与太郎の面白さが描かれているが、都々逸そのものが出て来る訳ではない。

『落語全集』下巻所載「東男」(桂文治)には、次のような一節がある。

権「何を言やアがる、厭なことをいふな……オイ好きな事には心を奪はれるといふから手前の好きなことをすると大概のこととは忘れてしまふ、都々逸か何かやつて見ろ、都々逸には乙な文句が幾らもあるな」

半「あるやうに思はれるね」

権「何をツ、思はれるといふことがあるか、粹な文句の奴でもやつて見ろ」

半「やりてえと思ふけども、何しろモウ腹の中に米ツ気がなくなつちまつたからな」

権「止せやい、さういふことをいふと物が陰気になつていけね

えから、忘れろといふんだ、「地味な異見も結城の羽織、鈍のなののが末の為」なんていつたな」

半「ウムさうだな、結城といふものは習て居て徳用だからな」

権「何を言つてやアがるんだ馬鹿、得た損だといふ話をして居るんぢやアねえ、都々逸をやつて居るんだ……宜いのがあるな都々逸にや「別れて此のかた便りはないが、心変わりか若しや又」なんてえのがあつたな」

半「ア、さうかね」

権「さうかねといふのはねえよ、仕様のねえ野郎だな、「偶々逢ふのに東が白む、日の出に日延があれば宜い」なんてえな何うだい」

半「ウーン宜い塩梅だね」

権「何を言つてやアがるんだ、湯へ入つて居るんぢやアねえや、宜い塩梅といふ奴があるか、何かやつて見ろ」

半「壊れた枕をそくひで付けてと……」

権「よう／＼出たな、好きな道といふものは格別だ、呼出しが宜いから直ぐに出て来らア」

半「壊れた枕をそくひで付けてと……、聞いたかい」

権「聞かないよ」

半「きかなきや釘でも打つが宜いと」

権「殴るぜ此ん畜生、落語(おとしばなし)をしやアがる」

半「壊れた枕をそくひで付けて……」

権「オイ／＼それは今聞いたよ」

半「ウム、きいたら釘にやア及ぶめえ」

これは権太と半馬とのやりとりだが、権太が鋭つばい都々逸を出すのに対して、半馬が掛け合いを生かしながら、都々逸の続き物を出

しているのが面白い所である。

六、戦後昭和期落語と都々逸

(一) 『古典落語』

筑摩書房から刊行された『古典落語』第一期全五巻(昭和四十三年)、第二期全五巻(昭和四十六年)を再編集した、ちくま文庫版『古典落語』全七巻について、戦後の大物落語家の話に当たってみる。

ア、『古典落語 志ん生集』

『古典落語 志ん生集』では、三つの話に都々逸が見られる。

『三枚起請』には、次の一節がある。

あア……こんな都々逸があつたねエ、『年季があけたらお前のそばへ、きつと行きます断わりに』ツて都々逸があつた、これは話と同じ内容の都々逸を引き合いに出している。

『三枚起請』の末尾は次のようになってる。

「おいおい、ちよいと、俺がかけてやるから……おう、もつと前へ出ねえ、おめえはたいそうな技術だなア、え？ 客をだますのに、起請を書かなきやおめえだませねえのか、え？ 口先でだませ、卑怯なことをするな本当(んど)に、いやで起請を書くときは、熊野で鳥が三羽死ぬといわア」

「(しゃアしゃアとして)あ、そお？ あたしや三羽どこじゃないよ、いやな起請をどつきり書いて、世界の鳥をみんな殺すんだよウ」

「鳥を殺して、どうするんだい」

「朝寝がしたい」

これは有名な「三千世界の鳥を殺し、ぬしと朝寝がしてみたい」を踏まえたオチである。

『親子酒』には、次の都々逸が出て来る。

「この酒を止めちやいやだよ！ 酔わしておくれ……サ……まさか素面(しらふ)じゃ言われぬい」

この都々逸は志ん生のお気に入りだったらしく、CDを聞いていると、あちこちで出て来る。

イ、『古典落語 文楽集』

『古典落語 文楽集』には都々逸を発見できなかった。

ウ、『古典落語 圓生集(上)』

『古典落語 圓生集(上)』では、「妾馬」に都々逸が現れる。

解いて結んで結んで解いて、今度結べば胸結び

これは、袴の紐を結ぶ時の台詞である。

「妾馬」では、殿様と八五郎のやりとりで都々逸が出て来るのが定型のようである。

「……酒が少し湿めッぽくなつてきやがった。殿様ア、景気が悪いから、一ツ歌でも唄おうかね」

「何か珍歌があるか。どうじゃ」

「……ちんか。なんだ、変なことを言っちゃいけねえや。なんでえ、ちんかッてのア」

「何か珍しき歌があるか、どうじゃ」

「珍しき歌が？ あッははは、冗談言っちゃいけねえ、珍しい

歌なんてえのア俺達(こちとら)ア知らねえけれども、都々逸
なんてえのA乙なのがありまさあ、ねエ、

三日月は瘦せるはずだよありや病み(聞)あがり、それに
さからう時鳥……

なんてえのは、いいねえ。えへへ、

この酒をとめちや厭だよ酔わしておくれ、まさか素面(し
らふ)じゃ言にくい……

なんていい文句だねエ殿様」

「おう左様か」

「……こりや驚いた。へへ、なんだい。都々逸を聞いたら『よ
こらこら』とかなんとか言つてもらいてえなア、ツへへ。都々
逸を聞いて『さようか』ツてやがら、厭だよおい。さようか
じゃ都々逸アあとが出てこねえや、これアどうも……

悪縁か因果同士か仇(かたき)の末か

ツて、ねエ……

(節になつて)エエ、添われエエぬウウ(ママ)ほどオなおかア
わいイ……

なんてねエ、おオおいツと、くらあ……どうでえ殿公」

八五郎にとつて酒の席で出て来る唄といえは、都々逸であつたこと
が知れる。

エ、『古典落語 圓生集(下)』

『古典落語 圓生集(下)』には、七五の唄が二首出て来る
が、都々逸ではないかもしれない。保留しておく。

オ、『古典落語 金馬・小圓朝集』

『古典落語 金馬・小圓朝集』のうち、三遊亭小圓朝集には都々
逸は見られないが、三遊亭金馬集では二つの話に都々逸が出て来
る。

「居酒屋」には、酒がらみの都々逸が二首出て来る。

この酒をさ 止めちやあいわれな
まさかしらふじやあいわれな
飲ましておくれさ

都々逸の内容とは異なり、近くに好きな人がいる訳ではなく、ただ
酒が飲みたいといつて唄っているだけである。

好きなお酒を飲むなじゃあないが、まだその癖がやまめのか
これも都々逸の内容とは関係なく、ただ酒が飲みたいといつて唄
う都々逸である。

「唐茄子屋」には、四首の都々逸が出て来る。

富士の山ほど苦労はするが

元は一夜の出来心……

浮気心を唄つたものである。

あざのつくほどつねつておくれ

それをのろけのたねにする……

のろけ都々逸とでも言うべきものである。

酒も飲みなよ博奕も打ちな

たんと稼いだ端ただけ……

遊びの楽しみを唄つたものである。

玉の輿、乗りそこなつてもよくよするな

まさか味噌漉や、下げさせぬ……

強がりの都々逸である。

カ、『古典落語 小さん集』

『古典落語 小さん集』では二つの話に都々逸が出て来る。
「長屋の花見」では、次の都々逸が出て来る。

佃育ちの白魚（しらお）でさえも花に浮かれて隅田川……
花見時の風物を唄ったものである。

『浮世根問』には四首の都々逸が見られる。

お前百までわしや九十九まで、ともに白髪のはえるまで
これは有名なものである。

臆のよるまであの梅の実は、味も変わらず酸いのまま
竹ならば割つてみせたいわたしの心、さきへとどこかぬふし

〔節〕あわせ

松の双葉はあやかりものよ、枯れて落ちてても夫婦（みようと）
連れ

これらは松竹梅にかけた都々逸である。

キ、『古典落語 正蔵・三木助集』

『林家正蔵集』では、「中村仲蔵」に都々逸が出て来る。

都々逸にもございますが……

夢でもいいから持ちたいものは

金の成る木といい女房

というのがあつた。もう、あたくしどもの学問は、もつぱらこの
都々逸にたよつていまして、他には何もありませんでございますか

ら、お買い破りのないように、あたくしの好きな都々逸は

これほど惚れても死ぬのはいやよ

死んじやおまんまが食べられね

これは落語家一流の卑下である。

「桂三木助集」では、「芝浜」に都々逸が出て来る。

佃育ちの白魚さへも花に浮かれて隅田川……

これは『古典落語 小さん集』『長屋の花見』で出て来たものと同
じである。いずれもマクラの部分で用いられている。

(二) 『圓生全集』

昭和の大物ということで、円生・志ん生を取り上げる。まずは円
生から。

『圓生全集』第一巻上の「子別れ」には、次の都々逸が出て来る。

ま、譬に、七刻さがりに降りだした雨と四十過ぎて道楽をはじ
めたのはやまないと言いますがやまぬはずだよ先がないとい

う都々逸がある。

これは有名なので上の七七を省略したものであろう。一年はとつて
も浮気はやまぬやまぬはずだよ先がない」というのが全体の形であ
る。

『圓生全集』第一巻下の「小言幸兵衛」には、次の一節がある。

「こうなると唄わない訳にはいかないから、おまいの作が都々
逸を唄うたらう」

「ほう、作が都々逸なぞを……」

「唄わなきやアしやうがねえじやアねえか、新しいのにいいの
もできるが、古い文句にまた捨てがたいのがある『竹ならば
割つて見せたいわたしの心、先へ届かぬふしあわせ』なんてえ
のアずいぶん古い文句だ、お花がすぐ取つて『これほど思うに
もし添われずば、実も宝の持ちくされ』なんてなことで、おた

がいいいい仲になったのも知らねえで、やアどうも、都々逸は陽気でおもしろいなんで、てめえがそばで、えへらえへら笑つてら、馬鹿野郎ツ」

否定的な表現をしつつ、心の内を明かす、という設定にしてある。
『圓生全集』第三巻上の「居残り左平次」には、次の都々逸がある。

浮名立てちゃ、それも困るし世間の人に、知らせないのも惜しい仲……
恋の真つ只中にある若者の心をうまく表現したものである。

『圓生全集』第三巻上の「唐茄子屋」には、次の都々逸が出て来る。

玉の興、乗りそのうてもくよくよするな、まさか味噌こしやさげさせぬ

味噌こしならぬ唐茄子売りの籠を下けているという対照が面白い。

『圓生全集』第三巻下の「雁風呂」には、次の都々逸がある。
斬家殺すに刃物は要らぬ

大伸三つで即死する……
これはあくびの縁で出た、遊びの都々逸。

『圓生全集』第四巻上の「不孝者」には、次の都々逸がある。
叱首聞くとときや頭をお下げ

下げりや意見が通りこす……
教訓と言つていいのか、どうか、説明に困る都々逸である。

『圓生全集』第五巻下の「妾馬」には、次の一節がある。
「何か珍歌があるか、どうじゃ」

「……ちんか。なんだ、変なことを言っちゃいけねえや、なんでえ、ちんかツてのァ」

「何か珍しき歌があるか、どうじゃ」

「珍しき歌が？ あツははは、冗談言っちゃいけねえ、めずらしい唄なんてえの、アこちとらア知らねえけれども、都々逸なんてえの、ア乙ながありまさあ、ねエ、

三日月は瘦せるはずだよありや病み(聞)あがり、それにさからう時鳥……

なんてえのは、いいねえ、えへへ、
この酒をとめちや厭だよ酔わしておくれ、まさか菜面(し

らふ)じゃ旨にくい……
なんていい文句だねエ殿さま」

「おウ、さようか」

「……こりや驚いた。へへ、なんだい。都々逸を聞いたら『よこら』とかなんとか言つてもらいてえなア、ツへへ。都々逸を聞いて『さようか』ツてやがら……厭だよおい。さようかじゃ都々逸アあとが出てこねえや、これアどうも……」

悪縁か因果同士か仇(かたき)の末か
ツて、ねエ……

(節になつて) エエ、添われエ……ぬウ……人ほどオなおかアわ
いいイ……

なんてねエ、おオ……オイツと、くらあ……どうでえ殿公」

八五郎の得意が都々逸であつたことを示すものである。
『圓生全集』別巻上の「田能久」には、次の都々逸が出て来る。

昔いた起請もあてにはならぬ、筆に狸の毛が混じる
狸の縁で出てきた都々逸であつて、文脈的にはあまり意味がない。

『圓生全集』別巻中の「たらちね」は、
縁は異なるもの、さて、あじなもの、独活が刺身のつまになる

という都々逸が始まっている。「縁」を出すための都々逸である。「圓生全集」別巻中の「浮世風田」には、「湯ぶくれ都々逸」というものが出て来る。これは「あくびにはじまってあくびでおしまひになる」というものである。

『圓生全集』別巻中の「近江八景」には、次の都々逸が出て来る。男の好くよな男でなけりや粹な年増は惚れやせぬ
さもあらんという都々逸である。

『圓生全集』別巻下の「五百羅漢」には、次の都々逸が出て来る。鐘の中でもいらない鐘はかねがね氣兼ねに明けの鐘

「かね」つくして洒落ているが、枕の部分で遊びに使った都々逸である。

(三) 『五代目古今亭志ん生全集』

『五代目古今亭志ん生全集』第一巻の「船徳」には、次の一節がある。

でいろんなもんがいたんですねエーあすこにねエー……エエ、
いっぺん海豚が泳いで来たことがある……ええ、ちようどオ四
月頃でしたなア。『荒海育ちの海豚でさいも、花に浮かれて隅
田川』なんという、都々逸を、都新聞に、誰だかがだしました
けども、エエちようどそうですなア、六十年くらい前ですなア
……考イリやアよくそういうことを覚えてるもんですよ。

これは新聞投稿の都々逸のようである。

『五代目古今亭志ん生全集』第一巻の「五人廻し」には、次の都々逸がある。

送る朝寒、迎える夜寒

遊里(さと)の廊下に泣く素足

これは花魁が素足でいることの辛さを詠んだものである。

『五代目古今亭志ん生全集』第二巻の「火の災難」には、次の都々逸がある。

『この酒を止めちやいやだよ酔わしておくれ』なんてなア、まさアかア素面じゃあア……(唄いながら茶碗をあおり)言われなアあい……

都々逸の内容とは無関係に、酒飲みが酒を飲む景気づけに唄っているようなものである。

『五代目古今亭志ん生全集』第二巻の「付き馬」には、次の都々逸がある。

惚れて通えば千里も一里

長い田圃もひと跨ぎ……

これは吉原通いの都々逸である。

『五代目古今亭志ん生全集』第三巻の「お茶汲み」にも、同じ都々逸が出て来る。

惚れて通えば千里も一里

長い田圃もひと跨ぎ……

同じく吉原田圃を唄ったものである。

『五代目古今亭志ん生全集』第四巻の「子別れ」には、次の都々逸が出て来る。

初会惚れして私や羞恥(はずか)しい、裏に来るやら来ないやら

これは女郎買いに行く男が、女郎にこう言われるのではないかという期待感から唄ったものである。

同じく『五代目古今亭志ん生全集』第四巻の「子別れ」には、次の一節が出て来る。

惚れエてエエ、通えばアアてなア、
後ろが省略されているが、「惚れて通えば千里も一里長い田圃もひと跨ぎ」である。

『五代目古今亭志ん生全集』第四巻の「文違い」には、次の都々逸が出て来る。

星の数ほど男はあれど月と思うは主一人
これは間夫を詠んだものである。

『五代目古今亭志ん生全集』第四巻の「妾馬」の最後の所には、沢山の都々逸が出て来る。

(略)……「この酒をとめちや嫌だよ酔わしておくれさ、まさか素面じゃ言われぬ」とくらア。ねえ殿様ア」

「あア、左様か」

「……なアんだ、都々逸を左様かだッて。え？面白くねえじゃねえか左様かッてえのア、ねえ、

まるめて投げ込む紙屑籠は
愚痴や怨みの棄てどころ……

とくらア。ねえ、殿様ア」

しばらくして酔いが更に回ると新内の後で都々逸が立て続けに出てくる。

芝や神田は粗末にやならぬ

末は神輿の据えどころ……

いいねエ、え？

色のつくほど抓っておくれ

それを惚気のたねにする……

なアんでなア……

色のつくほど抓ってみたが

色が黒いんでわからねえ……

なんて……

顔を眺めてつくづく言うが、

私やお前の膝に寝る……

なんてね、いいね。え？ ええ……あア、

一生懸命に駆けてもみたが、

どうも馬には敵わねえ……

なアんで。腹が減るねエこういうのは。ねえもうひとつ、ひとつ歌(や)ろうじゃねえか。ねえ……(三味線で)ととオんとオん、ととオん、さア、ねえ……

三日月は復せるはずだよ、ありや病み(間)あがり、それを苛める時鳥……

ときやがらア、ねえ……おオオいッとくらア。どうだい殿

公」

酔ったという設定でないと、これだけ多くの都々逸が次々と現れることはないであろう。

『五代目古今亭志ん生全集』第四巻の「二階ぞめき」には、次の都々逸が出て来る。

惚れて通えば千里も一里

長い田圃もひと跨ぎ

これは吉原田圃を詠んだもの。

同じく『五代目古今亭志ん生全集』第四巻の「二階ぞめき」には、次の都々逸が出て来る。

傍(おか)惚れも三年すれば情人(いろ)のうち

格子馴染みも四年越し

これは素見客（ひやかし）を詠んだものである。

『五代目古今亭志ん生全集』第五卷の「五銭の遊び」には、次の都々逸が出て来る。

別れがつらいと小声でいえば、締める博多の帯が泣く

これは別れの辛さを色っぽく詠んだものである。

『五代目古今亭志ん生全集』第五卷の「首つたけ」には、次の都々逸が出て来る。

惚れて通えば千里も一里長い田圃もひと踏ぎ

度々出て来るが、吉原通いを詠んだものである。

『五代目古今亭志ん生全集』第五卷の「御家安とその妹」には、次の都々逸が出て来る。

伝言（ことづけ）たのまれ目籠に入れて

帰る途中に洩つちやった

これは頼まれた伝言を忘れた様を面白く詠んだものである。

『五代目古今亭志ん生全集』第六卷の「居残り佐平治」には、次の都々逸が出て来る。

男を惚れさす男でなけりや、粹な女は惚れやせぬ

ここでは、おだて文句として使つて祝儀をせしめている。

同じく『五代目古今亭志ん生全集』第六卷の「居残り佐平治」には、次の都々逸が出て来る。

芝や神田は粗末にならぬ、末は味噌麩さげどころ

これは遊女が惚れた客のことを地名を詠み込んで唄つたものである。

『五代目古今亭志ん生全集』第六卷の「六釣三次」には、次の都々逸が出て来る。

伝言（ことづけ）たのまれ目籠に入れて

帰る途中に洩つちやった

これはそのまま、頼まれた伝言を忘れた都々逸である。

同じく『五代目古今亭志ん生全集』第六卷の「六釣三次」には、次の都々逸が出て来る。

立てば芍薬、坐れば牡丹、歩く姿が百合の花

これは美女の形容で有名なものである。

『五代目古今亭志ん生全集』第七卷の「祇園会」には、次の一節が出て来る。

「なんたい……いい都々逸があるぜ、なア。『たまたま会うのに東が白む、日の出に日延べがしてみてえ』なんてなアいい

なア」

「ああそうかなア」

「お前もなんかやつてみなよオ」

「うん……『毀れた枕を続飯（そくい）でつけて』てんだ」

「そいつア効かねえなア」

「効かなきゃ釘でも打つがいい」

「なにイいつてやアんでイ……くたばつてなんかいつてやアン。ほかにねえかい？」

「毀れた枕を、続飯でつけて』てえン」

「いま聞いたよオ」

「効（聞）いたら釘にはおよばない」

「なアにをいつてんだーしかしイ味のあるもんじゃアねえかア、都々逸アなア、え？火鉢引き寄せ灰かきならし、主の名を掛

き目に涙」なんてなアいいなア」

「火鉢引き寄せ灰かきならし」

「それいま俺がやったじゃアねえかア、あと違うのかア？」
「うん。『焼けた天保銭でも出ればいい』」

「いやしいねエお前のア……。『痣のつくほどつねつておくれ、それを惚気(のろけ)の種にする』」

「痣のつくほどつねつてみたが、色が黒いんでわからねえン」

「手前のア変だなア……。もつとオ乙なのをやんなよオ、なア」

「膝にもたれて顔うちながめ、こども可愛くなるものか」さア
「エエ、『壁にもたれて草笥をながめ、こども空っぽになるものか』」

これは二人旅の暇つぶしに都々逸を唄いながら行くものである。

『五代目古今亭志ん生全集』第七卷の「塩原多助一代記」には、次の都々逸がある。

立てば芍薬座れば牡丹歩く姿が百合の花
美女の形容である。

『五代目古今亭志ん生全集』第七卷の「火事息子」には、次の都々逸がある。

婀娜な深川、勇肌(いさみ)は神田
人の悪いは飯田町

これは若者の気風を詠んだものである。

『五代目古今亭志ん生全集』第八卷の「寝床」には「ゆうくれ都々逸」というのが出て来る。これは湯船の中で唄う都々逸である。

『五代目古今亭志ん生全集』第八卷の「道灌」のオチの部分では都々逸が使われている。

「ああ『ななえやえ』か。『ななえやえ一は、はなはさけども、やまぶしの、みそひとだと、なべぞかましき』」

「ハッハッハエ、要な読みようすんなよ」

「エエ都々逸かア？」

「あお都々逸だつてえやがン。手前は歌道が暗エなア」
「暗エから提灯借りに来たんだよ」

和歌(短歌)を知らず、都々逸と思ひこむという趣向がオチの前提となつている。

『五代目古今亭志ん生全集』第八卷の「紙入れ」には、次の都々逸がある。

言付け頼まれ目籠に入れて帰る途中に溜っちゃつた
頼まれた言伝てを忘れたことを面白く詠んだものである。

『五代目古今亭志ん生全集』第八卷の「心中時雨傘」には、次の唄が出て来る。

可愛いおかたに謎かけられて解かさなるまい縋子の帯

この落語では「その頃の流行の歌」とあるので、都々逸ではないかもしれないが、歌型は都々逸と同じである。

(四) 『米朝落語全集』

『米朝落語全集』第七卷の「くやみ」には、次の一節がある。

文句だけ聞いてもらいますわ、文句だけな。都々逸には良え文句があるさかいな。この舌で、この舌で嘘をつくかと思えば憎

い、エハツ、咬んでエ、やりたいイ時もあるウー、昏うたら嬢、三味線放り出してわたいの膝へ、好きやあ一言うてな、

どウーッと……。アツハツハツハッあいつ今時分、心配して待つてるやろと思う。早よ帰つて、顔見せて安心させてやり

ま。さいなら、こめん

これは悔やみに来た筈がのろけて帰る男の言葉である。色っぽい都々逸を有効に使っている。

『米朝落語全集』第七巻の「かわり目」には、次の一節がある。けどなあ……お前いま縁というたやろ。なあほんまや。縁は異なもの、また味なもちゅう都々逸があるやろ、うどが刺身のつまとなるう……

これは「縁」という言葉から思い出した都々逸である。

七、まとめ

各資料における都々逸の出現状況は次の通りである。

『圓朝全集』では、人情噺三十八話中、都々逸が現れるのは一話、一首のみである。若い時、都々逸の創作があつた円朝の話に都々逸の現れることが少ないのは意外であつた。

『口演速記』明治大正落語集成』の明治期の話三百七十六話中、都々逸が現れるのは五話、五首である。

『口演速記』明治大正落語集成』の大正期の話四十三話には、都々逸は全く出てこない。

『落語全集』全三冊百十四話中、都々逸は四話に十四首現れる。これは昭和初期の資料であるが、「天災」に七首、「東男」に五首と集中的に出てくるのが特徴的である。

『古典落語』では、全百三十四話中、都々逸は九話に二十首現れる。「妾馬」に四首、「唐茄子屋」に四首、「浮世根問」に四首と、多く現れている。

『圓生全集』では、全百七十五話中、都々逸は十一話に十四首出

て来る。「妾馬」に二首出てくる。

『五代目古今亭志ん生全集』では、全百四十八話中、都々逸は十九話に三十五首出て来る。志ん生は、都々逸を好み、落語にも多く登場させていたことが分かる。特に「妾馬」に八首、「祇園會」に八首と集中的に出てくる。

『米朝落語全集』では、全百二十九話中、都々逸は二話に二首現れるのみである。上方落語では、都々逸を引用することが少ないようである。

総じて、明治・大正に比べて、昭和、特に戦後の落語に都々逸の引用されることが多い。これは何故であろうか。その理由の一つとして、音曲師・音曲噺の消滅が考えられるのではなからうか。音曲師がいつごろからどのような活動をしていたのか、正確な資料を把握している訳ではないが、六代目三遊亭円生の話によれば、昭和初期までは音曲師が音曲噺をしていたとのことである。それまで、都々逸は音曲師に任せていたものが、音曲師の消滅により、戦後の落語家は都々逸を落語の中に盛り取り入れるようになったのではなからうか。これを一つの仮説として、今後資料固めをしてゆきたい。

注

(注1) 『圓朝全集』全十三巻(春陽堂。大正十五年〜昭和三年)。

(注2) 『口演速記』明治大正落語集成』全七巻(講談社。昭和十五年〜五十六年)。

(注3) 『落語全集』全三巻(大日本雄弁會講談社。昭和四年)。

(注4) 『古典落語』全七冊(筑摩書房。ちくま文庫。平成元年〜二

年。)

(注5)『圓生全集』第一卷、第五卷(青蛙房。新版昭和四十二年、四十七年。)、別卷上中下(青蛙房。昭和四十三年。)、追悼編

(青蛙房。昭和五十五年。)

(注6)『五代目古今亭志ん生全集』全八卷(弘文出版。昭和五十二年、平成四年。)

(注7)『米朝落語全集』全七卷(創元社。昭和五十五年、五十七年。)